

〈陽気な悲劇〉の詩学

— W.B. Yeats の “The Second Coming,” “The Gyres” および “Lapis Lazuli” を読む

岩田美喜

W. B. イェイツ (1865-1939) は、アイルランドでイギリスからの独立運動が高まっていた時代にダブリンで生まれた。彼は、母国が「アイルランド自由国」として曲がりなりにも独立を果たした 1922 年の翌年にノーベル文学賞を受賞。ノーベル賞委員会が発表した受賞理由は、「高度に芸術的なかたちで一国全体の精神を表現した、常に傑出した詩のため」であった。

この引用が如実に示しているように、イェイツの詩はアイルランドの国家的激変と関連づけて読まれてきたし、本人もそれを肯定する発言を多々残している。いわば彼は、既存の社会秩序が崩壊するもまだ新しい秩序が見えない時代の落とし子であり、その〈寄る辺のなさ〉に対して人間がどのように立ち向かうべきかがイェイツ文学の中心的主題のひとつだったといえよう。本講義では、「再来」(“The Second Coming,” 1921)、「渦輪」(“The Gyres,” 1938)、「ラピス・ラズリ」(“Lapis Lazuli,” 1938) という三編の詩を扱い、中後期のイェイツにおける秩序崩壊の感覚と、そこから発展してきた「渦輪の歴史観」について説明を行った。さらには、後期作品に頻出する「陽気な悲劇」(gay tragedy) や「悲劇的な喜び」(tragic joy) といった撞着語法めく表現が、螺旋状に展開しながら崩壊する世界における一種

〈陽気な悲劇〉の詩学—W.B. Yeats の “The Second Coming,” “The Gyres” および “Lapis Lazuli” を読む

の英雄的な生き方として、皮肉以上の深い含意を持つことを、劇作家でもあった彼の演劇論を参照しながら論じた。

アイルランド内乱の時代（1919-1921年）に発表された「再来」は、「だんだんと大きな輪を描いて飛んでいる／鷹は、鷹匠の声を聞き取れない。／全てが崩れ落ちる。中心が持ちこたえられない」（1-3行）という有名な詩行で始まる。世界の秩序を支える心棒が外れ、全てが螺旋状に拡大しながら崩壊してゆくイメージが、鷹が鷹匠の統御を離れて飛んでいってしまう様子に例えられている。まさに「まったき無秩序が世界に解き放たれている」（4行）のだ。「再来」という題名が強く匂わせているように、この詩は世界の終末を歌っているのである。「再来」とは、世界の終わりに神がこの世に再降臨して、最後の審判を行うというキリスト教の考え方である。だが、詩人が幻視するのはキリストの再来ではなく、「ライオンの体に人間の頭をもった」（14行）キメラ的な怪物が、今まさに生まれいできると身をこごめている姿である。奔流のように紡ぎ出される「無秩序」（anarchy）のイメージの数々と、その先にあるのが「いかなる荒々しき獣なのか」（21行）という、覚束ないながらも希望的観測だけは許さない疑問形で終わり方は、詩人の不安の強さと生々しさを表している。

これに対して、アイルランドが独立を果たしたものの、独立後の国のありようがイエイツの理想から遠く隔たっていた苦味を噛みしめていた晩年の『最後の詩集』（1938）に収録された「渦輪」と「ラピス・ラズリ」の二編は、仮借ない歴史の流れに対して昂然とした態度を示そうとしている。前者の題にもなっている「渦輪」とは、前述のイエイツ史観を表すシンボルだが、螺旋を描きながら拡大と収縮を繰り返す歴史に対して、詩人は4度「何だというのだ」（What matter）という挑発的なリフレインを繰り返し、

歴史が教えるのはただ「悲劇的な喜び」（8行）であり、その声を知るのはただ「喜べ！」（16行）という命令なのだと言歌う。

一方の「ラピス・ラズリ」では、人は誰でも自分の悲劇を生きているものだが、「大役にふさわしい役者であれば／涙で台詞を詰まらせたりしない」（14-15行）と歌い、世界が悲劇であるからといって泣けばよい訳ではないと断じる。それに続く詩行で詩人が引いてくるモデルはハムレットヤリア王であり、彼らの陽気さは「恐れる者全てを変容させる陽気さ」（17行）なのだと言。つまり、詩人にとって「陽気さ」（gaiety）とは混沌に対峙する力であり徳なのである。

ハムレットは、イエイツの演劇論にもしばしば登場する。例えば、「悲劇の劇場」（“The Tragic Theatre,” 1910）の論旨は、「悲劇とは、個人を超えて世界全体を舞台上に抽出する壮大な芸術であり、そこで問題になるのは個々の事件や直接的な意識を超克した、純化された感情である」ということなのだが、ここでいう「悲劇」の好例として挙げられるのが、「ハムレットがホレイシオーに『しばらく幸福は捨て置いてくれ』と叫ぶ瞬間」なのである。この台詞をイエイツは余程愛していたらしく、死後出版の『ボイラーの上で』（*On the Boiler*, 1939）にも、「偉大な登場人物を最終的な歓喜へと導いてくれない悲劇など正統の悲劇ではない……『しばらく幸福は捨て置いてくれ』という台詞に、わたしは踊り出したくなるような音楽を感じる」という一節がある。くだんの引用元は『ハムレット』の最終場（5幕2場）で、後を追って死にたいというホレイシオーを諫めながら、ハムレットが（一緒に死ぬという）「幸福をしばらくは捨て置いて／この厳しい世界で苦しみながら呼吸を続け／おれの話語り伝えてくれ」と頼む場面である。イエイツの解釈ではおそらく、この場面のハムレットは「陽気」である。これに対してホレイシオーは、まだ悲劇的な世界を生ききって

〈陽気な悲劇〉の詩学—W.B. Yeats の “The Second Coming,” “The Gyres” および “Lapis Lazuli” を読む

ないので満足して死ぬことは許されず、語り部となる使命を与えられている。

要するに、イエイツ晩年の詩に類出する「陽気な悲劇」とは、単に悲劇的な事象に対する冷笑的態度を示しているのではない。「そもそも悲劇でしかありえない世界」を恐れずに直視する強さ、その世界を生き抜く力を、彼は〈喜び〉という単語に込めていたのである。